

### ニューヨークでの生活

遠藤 誠

1991年10月からニューヨークで生活しています。勤務先の昭和電工から2年間の海外留学の機会を得たのがきっかけです。その際、出来る事なら1度は暮らしてみたいと思っていたニューヨークの近くに行けたらと、留学先を検討していました。その結果、ニューヨーク市ブルックリンにあるポリテクニク・ユニバーシティーで、会社で行っていた仕事に比較的近い研究テーマで研究生生活を過ごせる事になりました。

ポリテクニクは工学部系の大学、大学院から成り、学部生約2600名、大学院生約650名、教員230名のこじんまりした学校です。特に化学科の高分子分野には、輝かしい歴史があり、現在も高い評価を得ているようです。化学科には現在19名の教授と34名の大学院生、10名のポスドクがいます。私はここで高分子の難燃化の研究を行っています。

企業と比べると、その設備はどうしても見劣りがし、始めの頃はやりたい事の半分も出来ないのではないか、と暗い見通しを立てていましたが、逆にそれが焦点を絞る事になり、良い結果をもたらした様です。何よりも、久しぶりの大学生活はじっくりと考える時間を与えてくれ、忘れていた思索に耽ける事の楽しさを思い出させてくれました。

こちらの大学にきて驚いた事のひとつは、その大学院生の構成です。ポリテクニクだけではなく、アメリカ各地の理工系でみられる現象だそうですが、大部分の院生が、中国系、韓国系、イン

ド系等のアジアの国々からの人で占められています。その内訳はアメリカ国籍を持つ人から留学生まで、いろいろですが、いわゆるWASPはほとんど見られません。その背景には現在のアメリカの社会状況が大きく影響を及ぼしているようです。よく言われるように、アメリカは人混みで石を投げれば弁護士に当たる、という程の法律社会で、法律家の羽振りが良い国です。その為、どうしても若い人は法律家への道を進みたがります。そして格の高い有名校法学系は経済力とコネの強い先住民族である白人が自然と多数を占めてしまいます。その結果、学力は高くとも法律系へは進学できない、後発民族であるアジア系は理工系へ集まる傾向が生じたようです。また留学生の場合は他の地域からよりもアジアから特に優秀な人たちが来ているからかもしれません。

留学生はいずれは帰国してしまうので、アメリカは彼らに学習の機会を与えているだけで、自国にはほとんど人材を提供できないのですから、将来の産業界、大学での人材不足は深刻ではないかと考えてしまいます。しかし、そこは移民の国アメリカ、最近ではロシア、東欧等から経験豊富なドクタークラスを積極的に受け入れて補っているようです。現にポリテクニクにも何人もそのような人達がいて、研究活動をしています。と言う訳で、まわりはほとんどが、英語が第2言語の人ばかりで、しみじみと英語は国際語なのだと感じました。

私の住まいはクイーンズと言う所にあり、学校へは地下鉄で1時間とかかりません。地下鉄に乗っていると必ず出会うのがホームレスの人達です。物乞いのために乗って来るのですが、そのパ

昭和電工株式会社 川崎樹脂研究所

(昭和56年応用化学科卒業・新制31回)  
(昭和58年大学院博士前期課程修了)

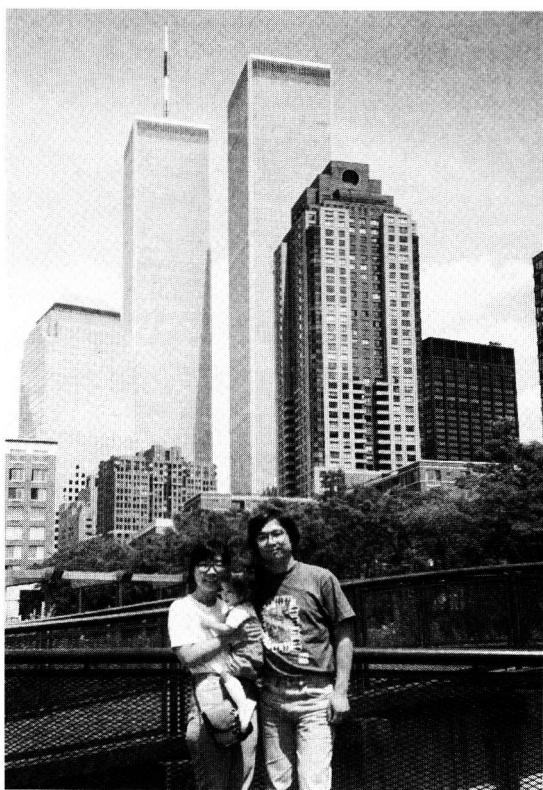
ターンはいろいろです。最も無気力なのはコインの入った紙コップをじゃらじゃらさせて歩くタイプです。一般的なのは、乗り込むなり、大声で名前と自分がホームレスである事を演説調で伝え、紙コップを差し出しつつ歩くパターン。もう少し頑張ると、1曲朗々と歌ってから紙コップという人達になります。ホームレスではないかもしれませんが、サックスでフリージャズもどきを演奏する黒人や、バイオリンでクラシックの1節を奏でていく老紳士などもいました。その他にも、お菓子を売り歩くインド系の人や、おもちゃを手提袋に入れて売っている中国系の人等がいて地下鉄の中は賑やかで、日本で言われているような危険なムードはほとんどありません。深夜でも人の多い車両に乗れば、怖い目にあう事もないようです。

ホームレスの存在は大きな社会問題になっていますが、解決策は容易に見だし難いようです。ホームレスといっても必ずしも一人で路上等で暮らしている訳ではなく、家族と共に市の施設や提供されたホテルに暮らしている様で、家と仕事がない他は、手厚い生活保護のおかげで生活に支障はないようです。だからその数は減らないのだと思いますが、市の財政はかなりの圧迫を受けているのは間違いありません。

彼らの存在は自由社会の厳しい一面を見せてくれています。つまり、自由競争なので、勝者は何処までも上昇できるが、逆に力のないものは、何処までも落ちていく社会だということです。そして勝者は敗者の面倒をみよう、というのが考え方のようなようです。

こちらの生活での我が家の1番の出来事は、長女の誕生でした。妻はこちらに来て半年日に子供を出産しました。アメリカで産むか、日本で産むか、留学が決まった時点で迷いましたが、何事も経験とアメリカで産む事にしました。近所に日本語の解る中国系のお医者さんがいたのは幸いでした。出産は設備の整った大病院で行い、そこへかかりつけのお医者さんがやってくるという方式でした。

帝王切開にはなりましたが、無事生まれた時に



はさすがにほっとしました。新生児室には、人種のもつばニューヨークらしく様々な肌の色、髪の色、顔つきの赤ん坊が並んで壮観でした。

妻は出産の翌日には自分で歩いてトイレへも行く様に指示され、4日目には退院しました。これは日本のやり方よりもかなり早いのではないのでしょうか。同室だった通常出産の女性は、早朝2時ごろに出産して、その朝にひとりでシャワーを浴びて、その翌日には赤ん坊をひょいと小脇に抱えて退院してしまっただけです。

何事も自ら行えとの、独立精神重視の現れかもしれませんが、いたれりつくせりだという日本流との違いを強く感じました。最も入院期間が短いのは、社会問題となっている高額な医療費の負担を少しでも軽くするためかもしれません。

まだまだ他にもいろいろな事が在りますが、ニューヨークでの生活は、日本での日常生活の中では感じる事の出来なかったいろいろな事を考えさせてくれ、私の心身を思いっきりリフレッシュさせてくれたのでした。